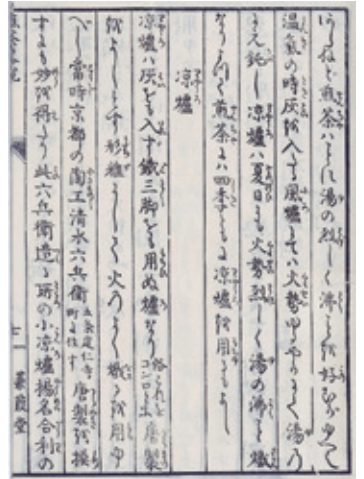
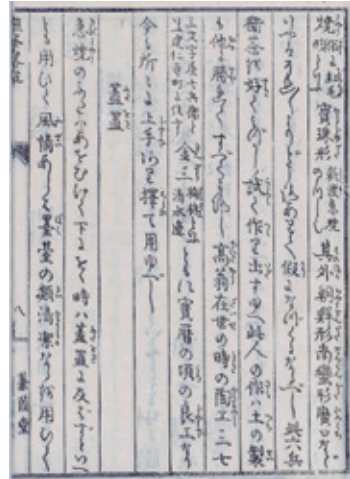


澤田楽水居著『煎茶略説』について

谷村アイ氏寄贈による大阪市立美術館所蔵「谷村為海煎茶関連資料」の中に、澤田楽水居著『煎茶略説』という煎茶書がある。目録・本文で17丁ほどの短い書籍で、年記の奥付がないために北邨春豊の後跋に記された「寛政戊午の秋七月」がおおよその出版年を推測する根拠となっている。寛政戊午は寛政10年(1798)であり、煎茶書とし



て評価が高い上田秋成著『清風瑣言』寛政6年刊(1794)と街頭道者嵐翠著『自弁茶略』享和3年刊(1803)〔後世『煎茶早指南全』と改題〕の間に刊行されたものと思われ、大枝流芳著『青湾茶話』宝暦6年刊(1756)〔後世『煎茶仕用集』と改題〕、田能村竹田著『石山齋茶具図譜』・『竹田荘泡茶訣』・『竹田荘茶説』文政12年跋(1829)、深田精一著『木石居煎茶訣』嘉永2年序(1849)などの主要な煎茶書と比べると、注目度が高いとはいえないし、著者の詳細も知られていない。ただし、9行野入りの下段枠内に「兼葭堂」の文字があり、木村兼葭堂(1736~1802)が出版に関わっていた書籍であるので、清風社などの煎茶結社周辺の人物と考えられる。

本書の目録(目次)には、「製茶、蔵茶、擇水、潔瓶、候湯、煎茶、淹茶、花香茶、風爐、涼爐、小砂罐、蓋置、爐板、藤床、拭盞、茶鍾、茶盤、香盒、薫物、線香、茶托子、火筋、扱提、吹筒、羽帚、絹吧、料藤扇、茶注、茶漏、茶匙、茶焙、茶筴、紙囊、建水、漉水、滓盃、櫻札、竹杓、烏府炭、炭搨、堤籃」とあり、「花香茶」の本文の後には「右八件は曩に巽齋子上梓する所煎茶訣の和解なり。なを委しくはかの書を見て考ふべし。」とあって、「製茶」から「花香茶」までは、木村兼葭堂が翻刻出版した清国の葉雋之が撰著した『煎茶訣』宝暦14年甲申跋(1764)の和訳であると記している。茶を入れるまでの内容が自身の見解ではないことなどにより、煎茶書としての評価が高くならなかったのかもしれない。

しかしながら、煎茶訣の和訳は簡潔で分かりやすく、漢字の部分はほぼ総ルビで表記されているので、様々な茶事に関する言い方や、後半に記述された器物の名称を18世紀末から19世紀初頭の人々がどのように呼んでいたのかがよく分かる。また、日本製の和物陶磁器の煎茶器に関する同時代な記述が散見されることは重要で、特に「涼爐」や「小砂罐」の記述の内容には多くの知見がある。今その部分を抜き出してみよう。

涼炉
涼炉は灰をも入れず鉄三脚をも用ぬ炉なり。俗これをコンロといふ。唐製をよしとす。形雅にして火つよく熾るを用ゆべし。当時京都の陶工清水六兵衛、五条建仁寺町に住す、唐製を模するも妙を得たり。此六兵衛造る所の小涼炉揚名合利の印あるは、唐涼炉のうつしなり。形ちいさけれども火よく熾、他所へ持行もよし。二重涼炉も華物をうつして作り。持扱うに手熱からず。火をあふぐに灰ちらすしてよし。其外さまざまあり。作は此人に限らず湯の沸ことの速なるを用ゆべし。

小砂罐
急焼も唐製をよしとす。然れども其中に好悪あり。中にも最上の品は高翁所持の急焼南瓜形、唐物なり、清水六兵衛模形して、世上に売茶翁形というはこれなり。此外広東急焼、俗に紅毛形といふ、宝珠形、新渡急焼のうつし也、其外朝鮮形、南蛮形、広口などいふ名それぞれよりどころありて、仮になづくるなるべし。此六兵衛茶を好てみづから試て作り出すゆへ、此人の作は土の製も他に勝れてすべてによろし。高翁在世の時の陶工三七、三文字屋七兵衛といふ、建仁寺町に住す、金三、梅林といふ、清水辺、ともに宝暦の頃の良工なり。今も所、に上手あり。扱て用ゆべし。

初代清水六兵衛(1737~99)が、唐物写の揚名合利印銘のある小型の涼炉や売茶翁形という形状の急火焼の製作に秀でいることや、売茶翁高遊外が存命の頃に建仁寺町にいた三文字屋七兵衛や、清水坂あたりにいた梅林金三といった、他の文献には記載されていない急火焼作りの名工がいたことも確認できる。後半の煎茶器の記述に関しては、道具の使い方が中心であり、全体としては平易でマニュアル的な側面が強い煎茶書であるといえよう。

(守屋雅史)